

須恵器の甗の用途についての一考察

岩本 佳子

1 はじめに

須恵器の甗については、「須恵器の器形の種類。胴部に小円孔をもち、口縁が大きく広がる壺。竹などの管を通して液体を注いだという説」（平凡社 1996 ほか）が一般的である。筆者は須恵器の中でも甗の用途について考えるに、はたして注器としていたのかどうか、疑問をもつようになった。そこで本稿では、甗の用途について検討したい。

2 先行研究

まず先人の研究を振り返ると、甗の用途について諸説ある。

『倭名類聚抄』（14 澡浴）には「波爾佐布」と訓じている。同書には甗の文字を用い、属に椀（はんぞう）字を用いるとなし、「此器有柄半挿其中故名半挿也」とあり「柄中有道可以注水之器也」とある。つまり、この器には柄があり半分差込むために半挿（はんぞう）といい、柄の中に道があり水を注ぐ器であるとしている。

三宅米吉は「甗は式にツチタラヒと訓みたれども誤りなり、又匱と書いてこれをハサフとよむべきなり。和名抄漆器類の中に匱あり。曰く『説文云匱（筆者中略）』」としている。

坪井正五郎（坪井 1909）は甗の名称を検討して「吸い壺」とし、発見地について日本と韓国であり、韓国には今も用いる人があると述べている。吸い壺を全体の器形、横口の断面形、角度、頭部（口縁部か）の文様により型式分類している。甗を考古学の手法で型式分類した研究といえよう。また、底部について、坪井によれば、3つの分類がある。すなわち（一）座りの悪い丸底（二）座りの好い平底（三）糸底の付けてある底の三通りである。

中口裕は用途について先行研究を紹介したのち、樽形説、注口説に対する疑問、呪術説について述べ、製作実験、使用実験の提唱をしている（中口 1978）。

中村浩は「水などを注ぐものとしては、甗というものがある。これは壺の胴に1個の孔を穿ち、そこに竹筒のようなものを入れて注ぎ口とする。現在の土瓶のような機能を果たすものである。この器種も大・小の差や高台の有無、さらには装飾の有無などからも分類し、異なる名称を付している。またさらに、直口壺や注口状の折り目を入れたものなどが、同様の機能を果たしたものと考えられる」、としている（中村 1993）。

また菱田哲郎は陶邑の大野池 231 号窯出土の「樽形甗は中空の柄が付いた特異な形態のものである」とし、「小阪遺跡（大阪府）では、五世紀の集落跡が明らかになっている。（略）この遺跡から出土した須恵器の中には、土師器の高杯や壺、甗の形をそのまま模倣したのものがあり、須恵

器の高杯や甗の形を写した土師器もある。須恵器工と土師器の作り手の交流がわかる例として興味深い（略）。おそらく須恵器生産の開始時には、渡来した人々に混じって、在来の焼き物である土師器の製作者が動員されたのであろう（註）。甗は朝鮮半島の陶質土器に由来し、須恵器の器形としても、ごく初期から見られる。土師器にもまれにあり、小阪遺跡の出土土器はそのもっとも古い例である」、としている。ちなみに小阪遺跡の土師器の甗は5世紀のもので、土師器の甗としては最も古い例とされる。

3 甗の出土状況

甗の出土について、検討してみたい。愛知県陶磁資料館所蔵の資料については購入資料という事もあり、出土状況がわかりかねる（表1）。しかし、一般に古墳や窯跡から出土する事が多い。所蔵品の残存状態は良好で、完形で出土する場合と考えられる。また、中口によれば（中口1978）、「1952年に石川県片山津町小管波（土師）住居址の発掘を見学して土師甗がいくつも出土し、それらには装飾が全く無く、実用品としか考えられなかった」そうである。先述の小阪遺跡と考え合わせて、土師器の甗の存在が確認される例といえる。

4 甗の観察

愛知県陶磁資料館所蔵の甗を筆者は在職中に観察した（写真1）。観察した点数は4点である。甗の口に竹をそっと当ててみて、状況を観察する。須恵器の注口と竹の間に隙間ができる。筆者が観察した俵形甗の場合、通常の甗に比べて太い竹が必要であった。

もし先行研究にあるように、甗が竹などの管を通して液体を注いで用いられる物ならば、竹は様々な太さのものがいると考えられる。

5 製作

筆者は甗を製作しようと試みた。手本としたのは愛知県陶磁資料館所蔵の甗No.1793と、樽形甗（No.1400 中村1993 中の実測図参考）である。製作をした場所は当館の陶芸館である。平成20年春に伺い、陶芸指導員の近藤ひとみ氏、名越健二氏の指導を仰いだ。

①甗について

まず初めに製作したのは、甗である。器形は写真に準じている。まず粘土を手ロクロの上におき、底をつくる。紐を積み形づくる。初めは直立の形で、のちに内湾させる。そして口縁を形作る。次に孔をあける。ここでは竹を使用した。次に整形を行う。ここでは竹つきで周辺に粘土をつけて整形する形をとった。木の道具で波状文の文様を入れた。また、なめし皮で表面を整えた（写真2・4）。

②樽形甗について

まず初めに手ロクロの上に粘土を置き、底をつくる。筒状に形をつくる。柄コテで胴の部分に膨らみをもたせ、形を整える。次に蓋をするように紐で覆う。口縁を別につくる。次に口縁を接合する。口縁は整形ののち糸切りを行う。焼成時に不安定なため、高台をつくる。なめし皮で表面を整え、完成である（写真3・5）。

制作の所要時間は①の甗が約1時間半、②の樽形甗も約1時間であった。使用した釉薬は①では伊羅保（いらば）釉、②は透明釉を用いた。当館の焼成では釉薬を用いており、その中で自然

のものに近いと考えられるため選択した。また、通常の焼成は電気窯で行っている。

6 考察

① 甕と唾壺の比較

筆者は、甕の用途について、以下の仮説をもつ。唾壺（だこ）ではないかと考えられる。国内でも出土事例がある。理由としては、形が非常に類似している点が挙げられる。

奈良文化財研究所の平城宮資料館で輸入陶磁器とされる唾壺が展示されている（写真6・図1）。唾壺の集成については石尾正信氏（石尾1987）の研究に詳しい。

ただ、唾壺と異なる点は穿孔がない点が挙げられる。そのため甕と唾壺は、また別の系譜をもつと考えられる。

② 穿孔された穴に竹の管を使うか否かについて

また、焼成前に孔を開ける際に、竹の管を使用するという説についても検証する必要がある。方法としては、観察と、作製による復元実験が方法として考えられる。

筆者は今回、竹の管を用いて孔を開けた。押し当てると、若干へこむが、破れることなく孔を空けることができる。収縮については懸念されるところで、5-①で製作した甕については、製作に用いた竹が通らなかった。焼成後の孔が0.9cmで、穿孔に用いた竹の直径が1.1cmであったため、この場合の収縮率は81.81%になる。従って穿孔に用いる竹を差し込み、注ぎ口とするのは難しい。

ただし、出土品から察するに、孔よりも小さい竹の筒を差し込む事ができることから、当初は穿孔をするならば、孔より太めの筒を用いていた可能性が考えられる。

ちなみに、今回は竹を用いたが、現代はポンスと呼ばれる道具を用いて孔を開けるそうである。

7 小結

甕について、分かったことは、まず土師器の甕があるということである。これから察するに、須恵器と土師器、2種あるということで、当時としては一般的な器種であったと考えられる。窯や古墳以外に住居からも出土しているという事から特殊な器種ではないであろう。

次に用途について、甕が唾壺という可能性について考えてみたい。朝鮮半島にも類似する器の種類があることは周知のとおりである。朝鮮半島で用いられた器が、日本に持ち込まれ、古墳時代に使用されたのであろう。使用方法としては、口縁部から痰あるいは唾を吐き、使用後は口縁部から水をいれ穿孔部分から流すのが、妥当ではないかと考えられる。その後、中国の影響を受けた施釉の唾壺にとって代わられる様になったのではあるまいか。当初、孔は忠実に作られていたが、形式化し、穿孔された孔は施釉の唾壺に至る変遷の過程で消失したと考えられる。

筆者の考えでは、甕を使う習慣は大陸つまり朝鮮半島からもたらされ、奈良時代に至り甕に代わる唾壺は中国の影響を受けて、存続した。しかし平安時代には唾壺を使う習慣がなくなった、あるいは唾壺を使う人々、つまり渡来系の人々がいなくなった、あるいは国風化したことが可能性として考えられる。現在の日本では、痰を吐くという行為は忌まれる傾向がある。しかし中国においてはよくある行為であることも、この考えに至る一因となっている。岩崎（小松・岩崎2000）によれば、喫煙具のたばこ盆の付属品、灰落としを庶民は身近な痰壺代わりに使用することもあり、灰落としを洗うことが朝の日課であったという。これは痰の始末として灰が火の始末として

痰が都合良かったからとの事である（岩崎均史氏が修復科学の岩崎友吉氏に伺った話より）。このことより近世においても日本で痰、ひいては唾を処理する習慣があったと考えられる。古墳時代においては馬を駆って移動し国を統一する動きもあった事も考えると、埃のたつ中で嚏を使う必要性があっただろう。

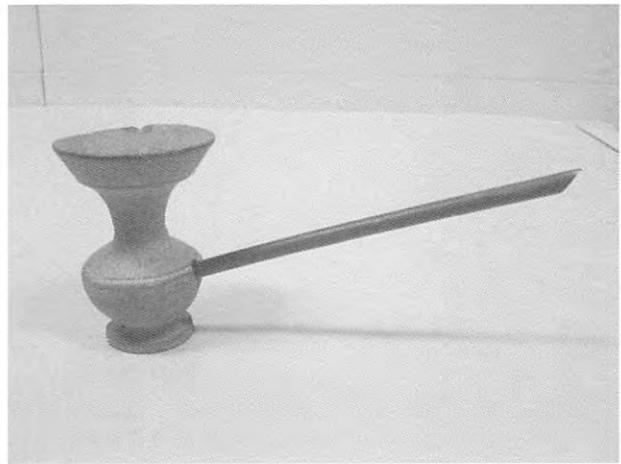
この考えは憶測に過ぎないかもしれないが、一つの可能性として、嚏そして唾壺の消長を考える参考になれば幸いである。

謝辞

小稿を記すにあたり、下記の方々にお世話になりました。記してお礼申し上げます。
愛知県陶磁資料館学芸課、奈良文化財研究所、千田剛道氏（奈良文化財研究所）、山口重信（愛知県陶磁資料館専門員）・近藤ひとみ氏（同館陶芸指導員）・名越健二氏（同館陶芸指導員）ほか陶芸館の皆様

参考文献

- 坪井正五郎 1909 「吸い壺について注意すべき諸事項」『東京人類学会雑誌』第 24 号第 277 号 東京人類学会
- 中口 裕 1978 「嚏の用途」『考古学研究』25-3
- 佐藤泰三 1985 『日本の美術』第 235 号 陶磁（原始・古代編）至文堂
- 石尾正信 1987 「長岡宮跡の緑釉唾壺について—唾壺集成—」『京都府埋蔵文化財論集 第 1 集』
- 斉藤 忠 1992 「嚏」『日本考古学用語辞典』学生社
- 平凡社 1996 『やきもの辞典』
- 愛知県陶磁資料館 1988 『愛知県陶磁資料館所蔵品図録』
- 菱田哲郎 1996 『須恵器の系譜』歴史発掘シリーズ 10 講談社
- 中村 浩 1993 『須恵器』ニューサイエンス社
- 愛知県陶磁資料館 1998 『愛知県陶磁資料館所蔵品図録Ⅱ』
- 小松大秀・岩崎均史 2000 『日本の美術』第 412 号 喫煙具 至文堂



① 甗 所藏品番号A1933 古墳時代後期 7世紀 陶邑



② 甗 所藏品番号A-1793 古墳時代中期 5世紀



③ 俵型甗
所藏品番号A761
古墳時代後期
6世紀

写真1 愛知県陶磁資料館所藏品 (甗)



1. まず粘土を手ロクロの上におき、底をつくる。



2. 紐を積み形にする。初めは直立の形にする。



3. 次に端部を内湾させる。



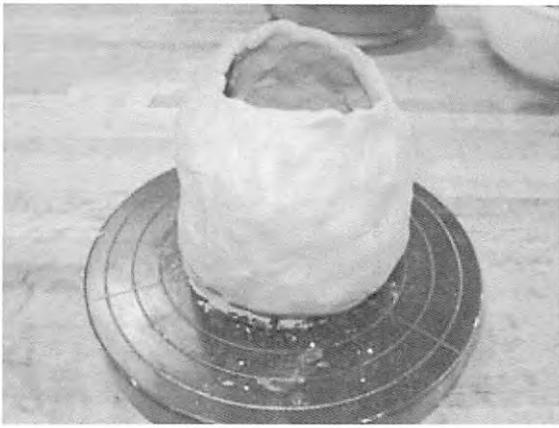
4. そして口端を形作る。



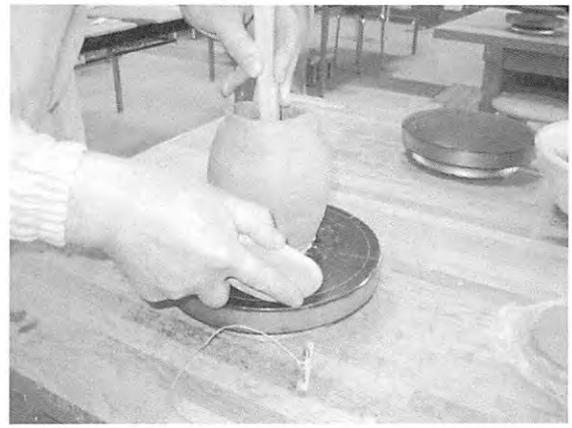
5. 次に竹を使用し孔をあける。
竹をつけて周辺に粘土をつけて整形する形をとった。



6. 木の道具で波状文の文様を入れた。
また、なめし皮で表面を整えた。



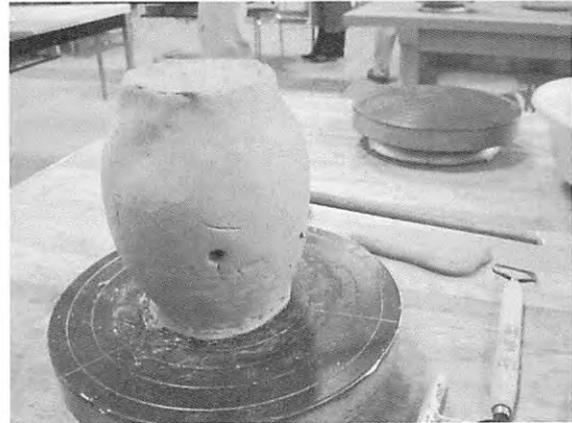
1. まず粘土を手ロクロの上におき、底をつくる。



2. 筒状に形をつくる。柄コテで胴の部分に膨らみをもたせ、形を整える。



3. 次に蓋をするように紐で覆う。



4. 次に孔をあける。ここでは竹を使用した。



5. 口縁を別につくる。そして接合する。口縁は整形ののち糸切りし調整を行う。



6. 焼成時に不安定なため、高台をつくる。仕上げになめし皮で表面を整え、木の道具で波状文の文様を入れて完成。



写真4 甃(復元製作品)



写真5 樽形甃(復元製作品)

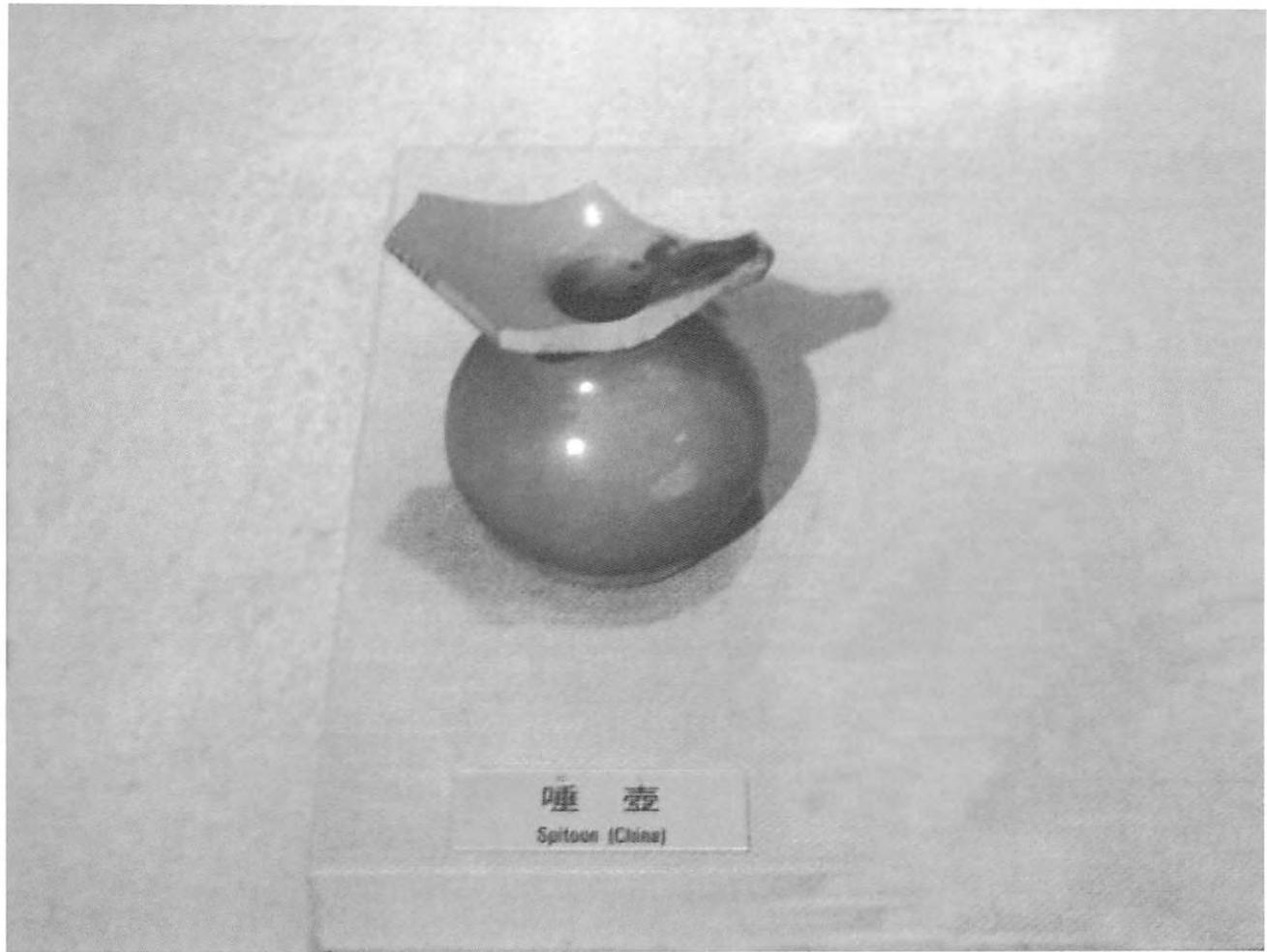


写真6 平城宮東院出土唾壺
(奈良文化財研究所 所蔵掲載許可済)

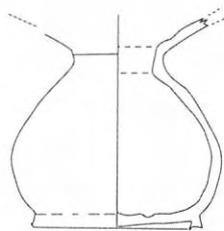


図1 平城宮東院出土唾壺 (石尾 1987 より筆者トレース)

名称	種類	産地	個数	寸法 (c m)	時代	世紀	所蔵品 番号	図録番号	本稿写 真掲載
樽形甗	須恵器	記載 なし	1	高17.8 口径 9.1 胴径14.4 ×19.6	古墳時 代後期	5世紀	No. 140 0	所蔵品図録 I 71	
俵形甗	須恵器	記載 なし	1	高25.0 口径 14.2 胴径22.0 ×19.0	古墳時 代後期	6世紀	No. 761	所蔵品図録 I 74	写真 1 -③
甗	須恵器	記載 なし	1	高13.5 口径 9.3 胴径7.5	古墳時 代後期	6世紀	No. 165 2	所蔵品図録 I 77	
甗	須恵器	記載 なし	1	高23.0 口径 21.5 胴径23.0 底径14.0	奈良時 代	8世紀	No. 154 7	所蔵品図録 I 85	
甗	須恵器	陶邑	1	高13.5 口径 13.4 胴径10.6	古墳時 代後期	6世紀	No. 193 2	所蔵品図録 II 25	
甗	須恵器	陶邑	1	高9.3 口径7.0 胴径5.5 底径 4.1	古墳時 代後期	7世紀	No. 193 3	所蔵品図録 II 33	写真 1 -①
甗	須恵器	記載 なし	1	高10.3 口径 10.0 胴径10.5	古墳時 代中期	5世紀	No. 179 3	所蔵品図録 II 56	写真 1 -②
甗	須恵器	陶邑	1	高7.5 口径5.4 胴径8.6 底径 6.5	奈良時 代	8世紀	No. 193 7	所蔵品図録 II 104	

表 1 愛知県陶磁資料館所蔵甗
(注・館蔵品図録Ⅲに該当品なし)